



『仏教看護の実際』

藤腹明子 著
定価 2520 円 (本体 2400 円 + 税 5%)
三輪書店
TEL.03-6801-8357

松下博宣

東京農工大学大学院技術経営研究科 教授

日本の看護界ではアメリカを中心に発祥・生成してきた理論、モデル、アプローチがこぞって紹介され、いわゆる近代科学としての看護学が全面に出てきている。しかしながら、このようなサイエンスとしての看護のみで完全に人を癒し、救済できるのだろうか。

否。患者は、せつなさ、やるせなさ、しんどさ、やりきれなさ、つらさ、不安、焦燥感、絶望、希望、苦しさ、スピリチュアルな痛みなどの内的な世界に、個別、特殊な意味を紡ぎつつ、生老病死という果てのない物語を生きているからだ。さらには、退嬰化しつつも、実は日本社会の内側に未だ深く埋め込まれている文化、習慣、習俗、価値観、共同体性といった大きな物語を、普遍志向が強いサイエンスのみでは十全に包摂できないからだ。

看護の臨床場面に 即し仏教を解説

私なりに読んだ本書の画期的な点を4つほど指摘しておきたい。第1に、一般的な看護師にはさほど縁がないであろう仏陀の教えを、現代日本の看護の臨床場面で実に分かりやすく解説している点だ。読者は、瑞々しい仏陀の教えを臨床現場で親しく感じ、複雑な判断をするときの依るべ＝倫理判断の規準の一端を見出すことができるだろう。

第2に、本書の構成である。筆者は、「仏教では、この世に生を受けるということは、すでにその中にさまざまな『苦』を内包しており、人間が根底的苦を基に据えた存在であ

るという人間観があります」(104ページ)としたうえで、生老病死のプロセスに沿ってさまざまなケースを丹念に展開している。どれも深く考えさせられる事例ばかりだ。

第3に、本書では、仏教の正統的な脈絡の上で議論を展開しているということだ。いわゆる大乘仏教の創作経典ではなく、あくまでも釈尊によって説かれた言説を忠実に伝承する阿含経典を中心とする原始仏教の教えと法に依拠している。著者が「七科三十七道品」に言及しているのは、本気で仏陀の教えに向かっている証左である。

第4は、ケアのイノベーションの本質に関連する点だ。近代科学の技術進歩を貪欲に利用するキュア(治し)のイノベーションは、要素還元的な方向性をますます強化し、臓器別、疾患別をさらに細分化、分節化させ、分子標的治療、遺伝子治療までも視野に収めつつある。その方向性が先鋭化するほどに、実は対蹠的な志向性をもつケア(癒し)の拡張が待たれているのである。本書は、人体のみにとどまらず、精神、身体性、人生、生活、生命、いのち、スピリチュアリティというようにホリスティックな方向性に沿っている。

和魂洋才という古い言葉を借りるのならば、本書は日本の看護における「和魂」を真摯に問いかけている。近代科学は、人間的であること、つまり豊饒なヒューマニティの支えがあつてはじめて真価を発揮する。看護に日本的ヒューマニティが、看護に教養なるものが要請されるのならば、私はその一部門として「仏教看護」を薦めたい。